

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

土佐桂子



学位申請者 上澤伸子

論文名 バングラデシュのガロ社会における社会関係の重層性と  
女性の生存戦略

## 【審査結果】

2020年3月30日、土佐桂子（主査）、栗屋利江、外川昌彦、丹羽京子、村山真弓（アジア経済研究所）からなる審査委員会は、上澤伸子氏より提出された博士学位請求論文「バングラデシュのガロ社会における社会関係の重層性と女性の生存戦略」の審査及び口述による最終試験（公開審査）を実施し、満場一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

## 【論文の構成】

序章

第1章 バングラデシュのガロ小史

第2章 調査村の概要

第3章 国家組織との交渉

第4章 教会組織との交渉

第5章 援助組織との交渉

第6章 女性たちがつなぐ重層的な社会関係

第7章 農村と都市をつなぐ

終章

## 【論文の概要】

本論文は、バングラデシュ中北部の災害常襲地域で暮らす、民族的にも宗教的にも少数派であるガロと呼ばれる人びとに着目する。序章では、「トライブ」、母系制、開発に関する先行研究の問題点を指摘し、それぞれの学問領域に固有の固定概念や潜在的な価値観を批判的に検討しつつ、現地の人びとの声につねに立ち戻ることの重要性を指摘している。

例えば、クリスチャンであるガロの人びとは、少数民族の「後進」性のゆえに公的支援へのアクセスが制限され、貧困状態から抜け出せないと説明されることが多かった。しかし、実際には、英領期から海外の宣教団やミッション系 NGO による教育・保健の支援を得ている。本論文では、こうした支援は何により引き出されたかを詳細に見ていく。また、ガロの女性たちは「母系制」や「女性の土地所有」といったフィルターを通して、「対等」な立場、「自律」「主体性」等が指摘されてきたが、ガロ女性はいつも「自己決定権」をもつわけではないし、歴史的変化も重要である。より具体的な日常生活やライフコースのなかでいかに「自己決定権」を発動するかに着目する必要がある。

こうした問題意識に基づき、以下詳細な記述が行われる。

第 1 章では、バングラデシュ社会における一連の政治・宗教体制が、少数民族に対して歴史的にいかなる政策をとり、かれらをどのように表象していたかを明らかにし、ガロの人びとが抱える問題を通時的に概観した。加えて、彼らの居住する中北部国境地帯では鉄砲水災害が頻発し、政府による洪水予測や対策の遅れのため貧困が常態化し、NGO が多数活動していることを指摘した。

第 2 章では、調査地域や村内の地理的な概要、集落の構成、および古老から聞いた村の成り立ちを示し、人びとの構成（人口構成、教育、生業、宗教、母系的な特徴）など、議論の基盤となるデータを提示している。

つづく第 3 章から第 5 章では、問題に直面した際に、女性達が国家組織、教会、NGO などの組織と交渉してどのように問題を解決しようとするかを明らかにしている。

まず第 3 章では、「母系制」の特徴がとりわけ顕著に表れる土地所有・相続に着目する。政府の土地政策や農業経済構造の変容、また私有地概念の生成、個人主義や平等主義といった価値概念の変容により、ガロ女性の土地所有権が危機にさらされたときに、国家組織に対して女性やその家族がいかなる交渉を行うかを示した。他方で、親族の役割が後退し、地方行政や NGO の介入がもたらされていることも指摘している。

第 4 章では、ガロ社会ではキリスト教が他宗教とのバウンダリーとして働くだけでなく、ガロ社会内部にも教派や男女のバウンダリーをつくり出していることを指摘している。とくに教会組織のジェンダー不均衡には、教会の女性リーダーは意識的だが、一般的女性信徒は教会のジェンダー問題に関心が低い。

第 5 章では、NGO が組織する女性グループの詳細を記述し、ガロ女性と NGO スタッフ双方の視点から「開発」実践をみることで、従来女性グループの自明性、「参加」という開発言説の均質性という問題を再考する。所得による NGO 「利用」の差異を明らかにし、NGO 女性グループへの「非関与」もまたガロ女性の戦略で、母系社会であることがグループ編成に影響していること等を指摘した。

第6章と第7章では、女性が他の人びととつながりながら、どのように諸問題に対処するかを母娘間と姉妹間の継承と変化に着目して記述している。

第6章では、調査村の経済的特徴がもっとも表れている大土地所有の給与世帯と、土地なしの日雇い農民世帯の事例をとりあげ、母娘の継承と変化という観点から分析し、いかに状況に応じて社会関係を選択し、問題を解決するか、また社会階層や世代による差異はあるものの母と娘がどのように相互に影響し合うのか、その特徴を示した。加えて、所得によらず家族の男性メンバーが女性の資源を間接的に用いている例を提示した。

第7章では、ガロ女性の都市就労の事例を示しつつ、周縁性こそが逆に有利に働き、美容師、家事使用人、看護師等の安定した就労がもたらされることも示しつつ、同時に、この就労が再度、民族性や宗教性と結びついて社会的な「周縁性」を固定化する可能性もあることを指摘した。また出稼ぎを通じて、農村との関係が切れるわけではなく、母系社会との関係を維持していることも指摘している。

終章では、各章のまとめを示したのち、全体の議論を概括するとともに、今後の課題を提示した。本論文で明らかにしてきたように、ガロ女性の場合は、少数民族に付与された他者表象を自己に取り込み、利用あるいは再利用している。とくに低所得層の女性は文字どおりの「周縁性」を、高所得層の女性はイメージとしての「周縁性」を活用し、いずれの所得層の女性たちもそれによって、国家組織や教会、NGOと交渉し、国内の司法や官僚制度、グローバルなキリスト教組織、開発援助組織から支援を引き出しており、これらがガロ女性の生存戦略であると結論づけた。

#### 【審査の概要】

最終審査では、断続的ではあるが10年以上にわたる人類学調査に基づく、貴重な成果であることが高く評価された。とりわけ、著名な人類学者である中根千枝以降、ほとんど誰も手をつけずにきたガロ研究を、「母系制」のありようの変化も含め、改めて正面から取り上げたことは特筆に値する。さらに、バングラデシュ社会において幾重にもマイノリティな立場に置かれるガロの人々を、その周縁性を含めて総合的に描き出したことの意義は大きい。女性と開発という重要なテーマを取り上げつつも、先行研究における固定概念や潜在的な価値観を十分批判的に検討し、当事者の生きざまに寄り添う形での生存戦略を見事に描き出した力作である。

一方で、いくつか、疑問、問題点、コメントなどが提示された。例えば、困難な状況下における多局面での女性の生存戦略を描き出す民族誌的貢献は明らかだが、ベンガルのジェンダー研究に、あるいはより広いジェンダー研究全体における理論的貢献を明示してほしかったというコメントが加えられた。また調査対象となる人々の代表性はどのようなも

のか、すなわち、この調査対象の人々はガロ社会全体のなかでどのような位置づけにあるのかという質問もなされた。ガロの人々の言語状況について論文内ではさほど触れられていないが、教育とベンガル化という問題と結びつくことから、もう少し詳細に記述してもよかったのではないかといったコメントも加えられた。

これらの質問やコメントに対して上澤氏は真摯に応答した。とくに、自らの論考で明らかにし得たものと、今後に残された問題の所在を明確に意識し、それぞれに的確な答えがなされた。

#### 【総合的な判断】

以上、論文審査及び最終試験の結果から、審査委員会は全会一致で、提出された論文が学術的に重要な貢献をもたらすものであり、上澤伸子氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に達した。